

終戦後協調會の性格は、G、H、Qの批判的となつたか、労働者側の態度は、實は創立當初より友愛會長鈴木文治氏によつて端的に表明されてあつた。同氏は、協調會發起の協力を拒否してその理由を發表したか、それは要するに、(一)協調會が労働組合に言及しないこと、(二)基金が富豪資本家の義捐によれること、(三)内務當局の盡力が生れたこと、(四)労働組合の代用とする内意があること、(五)階級道德觀を以て未開を國際的に示すこと、(六)労働者に接觸する人格者を欠いてること等を指摘して、日本現在の労働者は彼等自身の團結力によつてその地位の改善を計らんことを求め、協調會の成立に期待をせよといふ断言してあるのである。この聲明は、その最も強調

する労働組合に関する点々に誤解はあるか、協調會の成立に對して少くも労働者側の懐いた感覺そのものは、端的に表現し盡くされ、この感覺が長く終戦時に及んだことは、疑を容れぬところであると思ふべきであらう。

第二項 協調主義

協調會の標榜した協調主義は、概念的には平易な文字にはあるが、實は理論的にも實證的にも、進化の幾段階を経た社會的意義を内包してゐるのである。
大正の初頭、わか産業労働界に進歩的な濫澤男を見出したことは、日本の社會運動史上の一大福音であつた。その濫澤男は、明治廿九年第一回農商工高等會議で工場